



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	あんげろす第74号
Author(s)	真崎, 隆治; 竹田, 文彦; 李, 省展; 岡田, 仁; 植木, 献
Citation	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター, 74
Issue Date	2017-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/3260
Rights	

あんげろす

ミサ曲に思う

真崎隆治

軽井沢に来て本格的に合唱を始め 10 年になる。鑑賞ですませていたものを演奏する側に参加したことで、音楽とはこういうものだったのかと改めて思い知らされた。人生の秋のなかでの大きな収穫だ。多くの宗教曲を歌ってきた。最高はバッハの『ミサ曲短調』で、人は音楽によりここまで高みにのぼれるのかと感動した。あまり知られていない曲ながら、ケルビーニの『レクイエム』もすばらしい。死者を悼むというより、自分の死を直視して神に救いを訴えかける切実な叫びが胸を打つ。ミサ曲など歌詞はどれも決まり文句なのに、音楽は多彩だ。何事も深く極めようとする多様性のなかに個々の存在がきらめく。人生にしる、信仰にしる、それに変わりはない。

第 74 号

2017 年 12 月



オックスフォード大学大学院に留学していた頃のある日、日本から一団のキリスト教徒が英国の教会の視察にやって来られました。「こちらでは何の御研究をしておられるのですか?」と問われた私は、咄嗟に「シリアのキリスト教、特にシリア語で著作した古代教父の研究をしています。」と答えました。すると質問されたその方は、ずいぶん変わったことを研究している物好きもいるものだと思われたらしく、「シリアのキリスト教ですか、何か恐そうですね。」と言われました。おそらくシリアという言葉から中東紛争や湾岸戦争を連想されたのでしょう。また、その場に居合わせたもう一人の方は、「へえー、シリアにもキリスト教徒いるのですか。」と意外な顔をなされました。あれから20年、今日、シリアは、戦争と殺戮、そして、「イスラム国」による支配と多くの難民流出に世界が注目する地となってしまいました。私の研究に対する人々の反応はほとんど変わっていません。シリアは、イスラム文化圏に属する国であり、その地のキリスト教など考えられないし、たとえキリスト教徒がいたとしても、非常に少数の、特殊な集団に過ぎないと考えられてしまいます。しかし、これは大きな誤解であり、またキリスト教の本質理解にとっても大きな損失なのです。

私がシリアのキリスト教の研究を始めるようになったきっかけは、『同情の心 - シリアの聖イサクによる黙想の60日』（聖公会出版、1990年）と題された一冊の本との出会いでした。当時、私は、大学院でキリスト教における修道生活、特にその起源とされる古代エジプトの砂漠の修道士たちについて研究していましたが、同時に、シリアにおいて営まれた柱上行者と呼ばれる、非常に高い柱を立てその上で暮らす独特の修道生活にも関心をもっていました。

たまたま見付けたその本との出会いを通してさらにシリアのキリストに対する興味をかき立てられた私は、思い切ってその本の著者で、シリアのイサクのシリア語原文を英語に翻訳したオックスフォード大学のS.P. ブロック先生に手紙を書いてみることにしました。それは、まだわが国にはシリア語やシリア・キリスト教のことについてきちんと教えていただけないような先生は誰もいなかったからです。そして彼は、是非、自分の元に来てシリア・キリスト教の研究をするように勧めてくれました。ブロック先生は、英語圏におけるシリア・キリスト教研究の泰斗ですが、シリア語の基本的な読み方からシリア・キリスト教の歴史や文学など、シリア・キリスト教に関するすべてのことを日本から来た私に丁寧に教えてくれました。そしてシリア・キリスト教に関する学びを進めるうち私は、シリア・キリスト教は、単に特異な形態の修道生活を生み出しただけに留まらず、非常に豊かな独自の神学や霊性をもっていることに気付かされたのでした。

パレスティナに誕生したキリスト教は、その後のローマへと広まり、西洋文化と結び付くことで発展してきましたが、世界宗教となったキリスト教は、今日、一種の転換点を迎えているように感じます。これまでキリスト教国と言われてきたヨーロッパ諸国では信者の数が落ち込んできていますし、他方、欧米以外の宣教地の国々では、宣教師たちによってもたらされたキリスト教がもっていた西洋文化の重荷をふりほどいてその国の文化により相応しい新しいキリスト教の在り方が模索されています。そんな状況において私たちは、改めてキリスト教をその本質から問い直す必要に迫られていますが、その際、シリア・キリスト教は私たちに大きな示唆を与えてくれます。

第一に、シリアは、今日でこそ、イスラム文化圏に属する土地ですが、もともと旧約聖書の歴史が展

開した土地です。「シリア」、あるいは「シリア・フェニキア」、「シリア・メソポタミア」という地名は、聖書にしばしば登場しますし、ヨナ書に登場する「ニネベ」、パウロが回心した地とされる「ダマスカス」もシリアの町です。またシリア語とは、西セム語族に属するアラム語の一方言(チグリス・ユーフラテス川流域のエデッサを中心とする地域で使われていたもの)であり、イエスや使徒たちが話したとされるパレスティナ・アラム語とはヘブライ文字の代わりにフェニキア文字を用いている点が異なるものの、発音されれば完全に相互理解が可能な言語でした。つまりシリア・キリスト教とは、キリスト教が誕生したアラム語世界、より広く言えば、旧約聖書と同じセム語世界のキリスト教なのです。もちろん、エルサレムに最初に誕生した原始教会がもっていた信仰と全く同じというわけにはいきませんが、少なくとも西欧文化と結び付いていない、最初期のアラム的要素を強く有したキリスト教の在り方を私たちに教えてくれます。

たとえば、シリア・キリスト教の代表的神学者の一人、ニシビスのエフライム (Ephrem of Nisibis、約306年-373年)は、西欧化されたキリスト教神学が、ギリシア哲学の影響を受け、「永遠」、「超越」、「全知全能」、「存在」といった様々な概念を用いて神について論じたのに対して、あくまでも神は賛美の対象であり、説明的、分析的な散文ではなく、象徴や逆接、対比などを用いつつ、韻文を用いて語ろうとしました。これは、旧約聖書の「詩編」などにも通じるアラム的(セム的)特徴の一例と言えるでしょう。

第二に、シリア・キリスト教が広まっていた地域は、のちにイスラムが勃興することになる地域(今日では、「イスラム国」の支配地域)と重なっており、イスラムの公用語であるアラビア語も同じセム語族の言語であることを考えれば、イスラムとキリスト

教の歴史的、思想的関係を解く鍵がシリア・キリスト教にあることにもなります。実際、アラビア語の「アッラー」(「神」の意)は、シリア語では、「アラハー」であり、ほぼ同じ言葉なのです。第三に、五世紀に行われたキリスト論争の結果、異端のレッテルを貼られ、ローマ帝国を離れ、モンゴルを経て中国へと広まっていったとされるネストリオス派(この名称は、不適切であり、東シリア教会、あるいは、アッシリア教会と呼ばれるべきものですが、)は、中国において「景教」と呼ばれ、空海が留学した当時、かなり中国に広まっていたとされていますが、この「景教」について研究する上でもシリア・キリスト教に関する知識は欠かせません。

このようないくつかの点を指摘しただけでもシリア・キリスト教の重要性は明らかだと思います。残念ながらわが国においてシリア・キリスト教について研究している学者はまだ限られており、多くのシリア語文書が依然、研究もされず、翻訳、紹介すらされていないままになっています。グローバル化が進展する今日の世界において、改めてキリスト教そのものを本質から問い直すためにも多くの方に関心と興味を抱いて欲しい、そう願っています。

たけだ・ふみひこ (協力研究員)

東アジア情勢がにわかには緊張を帯びることとなった。かつて咸錫憲は『苦難の韓国民衆史一意味から見た韓国歴史』（新教出版）の中で、朝鮮半島は「世界の下水溝」と評したことがある。1989年以降90年代に冷戦構造は世界史的には崩壊したといわれることもあるのだが、ベルリンの壁崩壊以来、すでに四半世紀以上になるが、いまだに冷戦構造世界の矛盾が朝鮮半島に凝縮し、解決の糸口さえ容易には見いだせない状況が残存しており、一つ間違えれば戦争が勃発しかねない危うさの中に我々は生きざるを得ない。著名な韓国の歴史家・姜萬吉が「分断時代」と評したが、48年に朝鮮半島に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が建国されて以来、「分断時代」も来年は70年を迎えようとしている。

日中国交回復・沖縄返還・南北共同声明のあった1972年、東アジア史におけるクロノスのように思えた時代は現在という視点から振り返るとまるで蜃気楼のように思えてならない。何が真実なのかを見分けることが困難な時代にあって、日韓のキリスト教史にあって確かなものは何なのであろうか。その問いに力強い胎動として我々の心に着実に響いてくるのは内村鑑三の絶対非戦論ではなかろうか。

周知のように内村が「日清戦争の義」を『国民の友』で英文をもって世界に表明したのは1894年9月3日であった。「日清戦争の義」と邦訳されているが、英文は'Justification of the Corean War'である。朝鮮が戦場となり、中国と日本の朝鮮をめぐる覇権争いであったことから、内村の「朝鮮戦争」という表現はある意味で正鵠を得ているといえよう。義戦の論理を簡潔に纏めれば次のようである。内村は、日本は朝鮮の文明化を幫助しようとしているが、世界の進歩に逆行する中国はそれを阻止しようとし

ていると断じ、正義の戦争の可否と、介入の妥当性を検討した上で非戦こそが原則ではあるものの、自由を愛し人権を尊重するものには座視できないと、世界に向かって日本の戦争を正当化したのである。

「余が非戦論者となりし由来」が『聖書之研究』に掲載されたのは、1904年9月22日であった。それはまさに第二次旅順攻略が開始された直後であり、日露戦争がクライマックスを迎えようとしていた時である。この時点の内村の論調は実にすがすがしい。クエーカー派の友人に降参し、他人は「変説」したと責めるが、どうしようもないと述べている。世の中には説明責任も果たさずに変節する輩が巷に溢れているが、内村は「変説」の理由4点を明確にあげ、その責任を十二分に果たす。その原因として、1争闘をすべて避けよとする新約聖書の精神、2「不敬事件」の経験を通じた無抵抗主義の効用、3過去10年間の世界史の教訓、4アメリカの平和主義メディアの影響を挙げるのであるが、注目すべきは、第3の内村の言説である。内村は日清戦争の目的であった朝鮮の独立がかえって危うくなったことと戦勝国の道徳の非常なる腐敗を反省として挙げる。さらに刮目すべきは、内村のアメリカ帝国主義批判である。アメリカは米西戦争（1898年）の結果、フィリピンを植民地とした。現役兵2万で足りるとしていたアメリカが「今や世界一の武装国」となろうとしていると「第二の故国」・アメリカの軍事大国化を内村は徹底的に批判する。

在日本朝鮮YMCAの金貞植が総務として着任したのは日露戦争後の1906年であった。金と内村の交流はよく知られてはいるが、その底流には内村の帝国主義批判のみならず、この当時の朝鮮独立への信念があったように思えてならない。金との人間的な出会いを通して、朝鮮独立への希求は単なる観念としてではなく内村の「生涯の実験」となっていくものと推察される。同年の夏季講和会では「朝鮮のた

めに涙を注ぐ日本人記者は一人もない…」と述べ、「日本人の無情」を訴えた。また「韓国併合」(1910年)をなした日本の世論は領土拡大に沸き立っていたが、内村はそれとは対照的に「領土と靈魂」において、領土の増大によりかえって日本が靈魂を失ったことを嘆くのであった。

当時の内村のこのような卓越した朝鮮観は、当然ながら朝鮮人留学生を惹きつけたものと考えられる。その後、東京師範学校に学ぶ留学生を中心に、金教臣、咸錫憲、鄭相勲、宋斗用などが内村を訪れ、その深い交流を通して、朝鮮に無教会運動が継承され、1927年には『聖書朝鮮』の創刊を見るに至っている。

札幌農学校同級の新渡戸稲造が『武士道』を英文で発表したのが1900年であった。非戦論の冒頭で、内村は幼少から育んできた武士文化を自己否定している。このことから、内村はこの時には『武士道』を読んだ上で新渡戸と距離を取ろうとしていたものと思えてならない。「脱亜論」へと思想的転換をなした福沢諭吉は日清戦争の勝利に大喜びしたあげく感涙し、先祖の遺徳であると自伝に記している。その福沢を内村は「拝金宗」と痛罵している。「三田の聖人」を揶揄する論議を内村は英文でも展開しているのも興味深い。

きな臭くなり始めた東アジアの現況において日本の近現代史を福沢的なものと内村的なものとの対比で見ることも可能ではと殊に思う今日この頃である。

い・そんじょん(協力研究員)

宗教改革者マルチン・ルターは、聖書の神は十字架上のキリストにおいてご自分を現わされたと述べ、彼の十字架の神学を「栄光の神学」と対立させた。ルターにとって十字架は、人間が神を認識する場所であった。もし、教会が十字架抜き信仰に甘んじるならば、キリストの教会は栄光の神学(人間の眼からみて価値があり、称賛に値する事柄に神を求める)へと埋没する。聖書の信仰は、キリストの十字架に立つ。

ルター派教会出身のディートリッヒ・ボンヘッファー(1906-45)も、教会を「神の啓示の場所であり、そこで神が語り、我々のために存在される場所」と考えた。教会は御言葉が信じられるところに存在し、御言葉への服従がなされるところに存在する。しかし当時、ドイツの多くの教会はヒトラーに忠誠を誓い、御言葉ではなく、第三帝国(ナチスの支配体制)に服従した。敗戦直後、ドイツ教会は自らの罪責を告白する。日本のプロテスタント教会の歩みはどうであったのか。

日本基督教団(以下、教団)は、1967年に「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(以下、戦責告白)を議長名で表明した。しかしこの告白をめぐって激しい意見対立が起こり、その亀裂を收拾すべく「五人委員会」が選任され、答申が出された。そこで言及されているのは、戦責告白における「信仰と行為」の「行為」であって、信仰において過ちはなかったというものである。つまり、教団は、成立時も戦中も福音宣教を行なったがゆえに神に義とされた(信仰義認)教会であり、戦責告白は信仰の過ちではなく、行為の過ちの宣言にすぎないのだと。教団はその生き方においては懺悔すべき点があったが、義認・贖罪の主を信じて的外さ

なかったという。この答申の信仰に立ち続ける限り、教会の中に懺悔は起こり得ないであろう。懺悔がない限り、教会は同じような過ちや罪を無自覚的に繰り返す。我々は歴史を悔ってはならない。

「教会は十字架の言葉の上に築かれ、イエスの十字架において贖われ、義とされている事実を知るときに個々人の罪を自らに引き受けることができる」（ボンヘッファー）。「栄光の領域」ではなく、「十字架の領域」に立つ教会は、同時に罪責の認識が現実となる場所でもある。なぜなら罪責の認識は、キリストの恵みに基づいてこそ生まれるからだ。教会とは、キリストの恵みにより、キリストに対する罪責の認識に導かれた人間の集団であり、罪責を認識する場所なのである。

ルターやボンヘッファーが問題視したのは、義認の恵みと対峙する「安価な恵み」（抽象的かつ個人主義的で服従や十字架の無い恵み）であった。罪は罪なのであって本来赦され得ない。にもかかわらず、神は罪人を義とされた。この「高価な恵み」（具体的かつ現実的で他者へと向かう恵み）によって義とされ、赦されたがゆえに、我々は懺悔し、悔い改め、同じ過ちや罪を犯さぬよう和解と平和、奉仕、連帯へと促されるのだ。「自己義認」は、ヒトラーに象徴されるように、自らを絶対化し相手を暴圧的に支配するが、十字架のキリストの恵みによる義認は自らの罪責を告白し、他者に仕えるのである。

教団の罪責は、戦争への協力だけではなく、天皇を神とする国体に巻き込まれ、主イエス・キリストではなく天皇への服従を優先させる「日本的キリスト教」に陥ったことにある。これは行為の問題ではなく、まさに信仰の問題なのである。

戦後 72 年経った今もなお軍事基地の殆どを押し付けられ、戦争状態が続く沖縄を始め、分断、対立など緊張状態に置かれている北東アジアの教会と人々を想う。日本の教会は自己義認からの自由を語

り、キリストの十字架の福音を証しできるだろうか。告白する信仰者としての主体（個）の確立が今こそ求められている。

キリスト教主義大学として最初に戦争責任・戦後責任を告白した明治学院大学に、いま僅かではあるが関わらせていただいていることを光栄に思う。と同時に、教会とキリスト教主義大学の使命の重さを宗教改革 500 年・戦責告白 50 年の今年、強く考えさせられている。

おかだ・ひとし（協力研究員）



植木 献

先日、アジア神学セミナー開講記念シンポジウム「東アジアの近現代史とキリスト教」を開催した。

「中国の近現代史とキリスト教」と題し、陶飛重氏（上海大学）、「韓国の近現代史とキリスト教」を張圭植氏（韓国・中央大学）、「日本の近現代史とキリスト教」を山口陽一氏（東京基督大学）がそれぞれ講演し、議論を行った。

内容もさることながら、異なる言語、文化から3つの発題が行われ、共有されたこと自体に意義を感じる。英語ではなく、発表者それぞれの言語で語られたことは身体性を伴った言葉としての重みを実感した。

もちろんその意義は、討論の中で声が上がったように、東アジアの課題が中国、韓国、日本に集約しているということでない。国家の、ナショナリズムの枠組みを相対化する視点としてのアジアでなければカテゴリーによって切り捨てられていく、小さな痛みや課題を見失うことになってしまうからだ。

これから、協力関係を結んだ三研究所がどのような成果を上げていけるかはまだ未知数だが、そのための試行錯誤自体に意味があると思いながら、今後のプログラムを練り上げていきたい。

このシンポジウムのために、コメンテーター、翻訳、通訳、さらに様々な準備をしてくださった方々お一人お一人に感謝申し上げます。

うえき・けん（主任）

研究所活動（2017年7～12月）

キリスト教研究所1日研究会

開催日時：2017年7月22日（土）15：00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館92会議室

発表①

「中国国民党と反キリスト教運動——孫文の葬式を手掛かりに」

発表者：朱海燕（客員研究員）

コメント：金丸裕一（立命館大学教授）

発表②

「五四運動と中国キリスト教界の「反日」言説」

発表者：土肥歩（客員研究員）

コメント：渡辺祐子（教養教育センター教授、所員）

懇親会

開催日時：2017年7月22日（土）18：00-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

アジアキリスト教史研究プロジェクト公開研究会

「中国教会の過去・現在・未来」

開催日時：2017年9月14日（木）15：00-17：30

開催場所：明治学院大学白金校舎本館3階1310教室

講師：王艾明氏（元南京金陵神学院副院長）

通訳：松谷暉介氏（本研究所協力研究員）

協賛：中華圏プロテスタント研究会

賀川豊彦研究プロジェクト共催

「第3回賀川豊彦シンポジウム

「協同」がつながって日本社会を変える！

転換する社会の中での連帯」

開催日時：2017年11月11日（土）14：00-16：00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館1301教室

パネリスト：逢見直人（日本労働組合総連合会事務局長）、

比嘉政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）、

二村睦子（日本生活協同組合連合会組織推進本部長）、

石田正昭（龍谷大学農学部食料農業システム学科教

授、日本協同組合学会会長)

コーディネーター:稲垣久和(東京基督教大学大学院教授)

アジア神学セミナー開講記念 国際シンポジウム

「東アジアの近現代史とキリスト教」

開催日時:2017年11月18日(土)13:00-17:30

開催場所:明治学院大学白金校舎本館10階大会議場
プログラム

開会講演:アジアキリスト教研究の主題—徐正敏(明治学院大学)

発表1:中国の近現代史とキリスト教—陶飛珏(中国上海大学)、通訳:土肥歩(本研究所客員研究員)

コメント:渡辺祐子(明治学院大学)

発表2:韓国の近現代史とキリスト教—張圭植(韓国中央大学)、通訳:朱海燕(本研究所客員研究員)

コメント:李惠源(韓国延世大学)

発表3:日本の近現代史とキリスト教—山口陽一(東京基督教大学)

コメント:李省展(恵泉女学園大学)

総合討論

懇親会

開催日時:2017年11月18日(土)18:00-19:30

開催場所:明治学院大学白金校舎本館10階大会議場

協力:韓国中央大学史学研究所、中国上海大学宗教と社会研究センター

公開講演会

「文一平(ムンイルピョン)と明治学院」

開催日時:2017年12月8日(金)14:00-16:00

開催場所:明治学院大学白金校舎本館9階92会議室

講師:崔起榮(韓国西江大学教授)

通訳:朱海燕(本研究所客員研究員)

宣教師研究プロジェクト研究会

第4回

開催日時:2017年9月15日(木)13:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所
第5回

開催日時:2016年10月6日(木)13:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所
第6回

開催日時:2016年11月30日(水)13:30-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

新着図書

・『説教黙想 アレテイア』No.98、日本基督教団出版局、2017。

・『福音と世界』No.8、新教出版、2017。

・『福音と世界』No.9、新教出版、2017。

・『福音と世界』No.10、新教出版、2017。

・『福音と世界』No.11、新教出版、2017。

・『福音と世界』No.12、新教出版、2017。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第74号

2017年12月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩